Ⅲ　佐紀池の調査（第101次）

第１０１次調査は佐紀池において行った。佐紀池は、平城宮の西北部にある東西１６０ｍ、南北１５０ｍの逆Ｌ字形を呈する池である。今般この池の北部にのこる民有地について、現状変更の申請があり、文化庁文化財保護部の指示にもとずき、その可否をきめるべきの事前の発掘調査を行った。

調査地区は６ＡＣＡ－Ｗ・Ｓ地区と６ＡＣＢ地区におよぶ。１９７７年１月７日から調査を開始し、３月２５日に終了した。

佐紀池は明治１７年にそれまで水田であった当地域の南側、つまり現在の一条通りの線上に築堤してつくる新しい池である。佐紀池の北方には御前池、下吉田池、上吉田池が連なり、平城宮造営以前には奈良山南麓の谷筋であったことが想定されている。第９２次調査では、一条通りの南側で、奈良時代の池の南岸および排水口を発見し、佐紀池一帯が奈良時代平城宮の園池である手掛りをえた。

今回の調査では、奈良時代の園池が佐紀池北端まで続いていること、および、その規模が現在の佐紀池とほぼ等しいことが明らかとなった。また、堰をもった古墳時代の溝も検出され、当地域の古墳時代を知る上で成果があったが、とりわけ、従来この地域では未発見であった縄文式土器を検出したことも看過しえない成果であった。

１　遺　構

佐紀池北端部の池底およびこれに東接する水田に南北幅１５ｍ、東西長６７ｍの東西トレンチを設定し、さらに、東西トレンチの東南約３０ｍの地点の池底に旧園池汀線と思われる段差があるため、ここに東西幅６ｍ、南北長２６ｍの南北トレンチを設定した。

東西トレンチでは、浅い所で現地表下１０cm、深い所で現地表下約２ｍに遺構面があり、この面で奈良時代の園池と溝、古墳時代の溝と土壙を検出した。

南北トレンチでは、北から南へゆるやかに傾斜する現地表下約４０cmに遺構面があり、奈良時代の園池と溝、古墳時代の溝を検出した。

a　奈良時代の遺構

奈良時代の遺構には、園池ＳＧ８５００、溝ＳＤ８５０１、溝ＳＤ８５０２がある。

園池８５００は、東西トレンチで東西両岸を、南北トレンチで北岸を検出した。西岸は直線的で真南北に走る。東岸は西岸に比べて曲折があるが、大勢として北で西へ約４５度ふれる角度で走っている。そのため、園池の東西幅はトレンチ北壁で４３ｍ、トレンチ南壁で５５ｍと、北で狭く南で広がっている。北岸は、東岸が南へのびて東折する延長線上にあり、東西に走っている。

岸はいずれも傾斜角約１０度のきわめてゆるやかなもので、斜面にはこぶし大の小礫を敷きつめている。敷石がもっとも良く残っている東岸の場合には、粘土質の斜面ベースに幅約２ｍで礫がしきつめられていた。西岸と北岸の場合には敷石の残りが悪く、とくに西岸では痕跡程度に小礫が点在する程度であったが、当初は東岸と同様に密に敷石があったものと考えられる。また、東岸では敷石の東側の岸上に大小の自然石が点々と配されており、これによって多少とも園池としての景観を整えていたものであろう。北岸北の岸上には直径１０～３０㎝の不整形の石抜穴が密に接する部分があり、ここでは石を並べていた可能性が強い。

東西両岸にはさまれた池底は、南北方向では若干南へ下るに対し、東西方向ではほとんど水平である。池底には厚さ１㎝以下の薄い砂の堆積層があり、砂層の上に厚さ約５０㎝の植物腐食層がある。植物腐食層から、奈良時代から平安時代初期に至る土器類とともに、瓦塼類、木製品、木簡、金属器、貨幣が出土した。

溝ＳＤ８５０１は東西トレンチ中央部の池底を南北に走る素掘りの溝である。幅約４０㎝、深さ約２０㎝の断面Ｕ字形の小さな溝で，溝中から木簡と須恵器が出土した。

溝ＳＤ８５０２は南北トレンチ中央部を東西に走る幅約５０㎝、深さ１０㎝の浅い素掘りの溝で、溝中から土師器と須恵器が出土した。溝ＳＤ８５０２の埋土のの上には灰白色の砂層が広がっており、この砂層から炭や焼けた木片多数とともに土師器、須恵器が出土した。この部分は園池池底にあたり、渇水時にここで火

を焚いたことがあったようである。

b　奈良時代以前の遺構

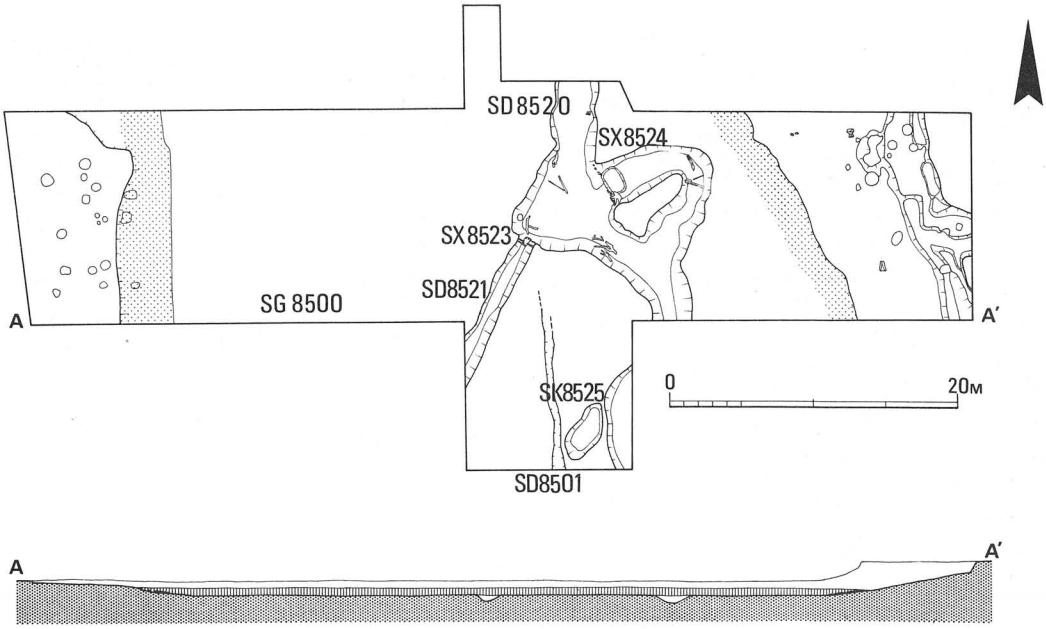
奈良時代以前の遺構には、溝ＳＤ８５２０、ＳＤ８５２１、ＳＤ８５２６、ＳＤ８５２７、ＳＤ８５２３、堰ＳＸ８５２３、ＳＸ８５２４、土壙ＳＫ８５２５がある。これらの遺構はすべて園池ＳＧ８５００の池底面で検出された。なお、ＳＤ８５１９は近世の溝である。

溝ＳＤ８５２０は、東西トレンチ中央部を北から南へ蛇行しながら流れる、幅約３ｍ、深さ約６０cmの溝で、途中で２つに分流したのち、また合流する。分流の始点に堰ＳＸ８５２４がある。溝には茶色の有機物腐食層、灰白色の砂層、黒色の粘土層が互層となって堆積しており、各層から土器、木器、金属器、植物の果実と葉、昆虫遺体が出土した。出土した土器類のほとんどは布留式の土師器で、庄内式の土師器、後期弥生式土器を少量含んでいる。ただ、溝最下層から布留式の土師器が出土し、整然とした時期的堆積層序を示してはいない。

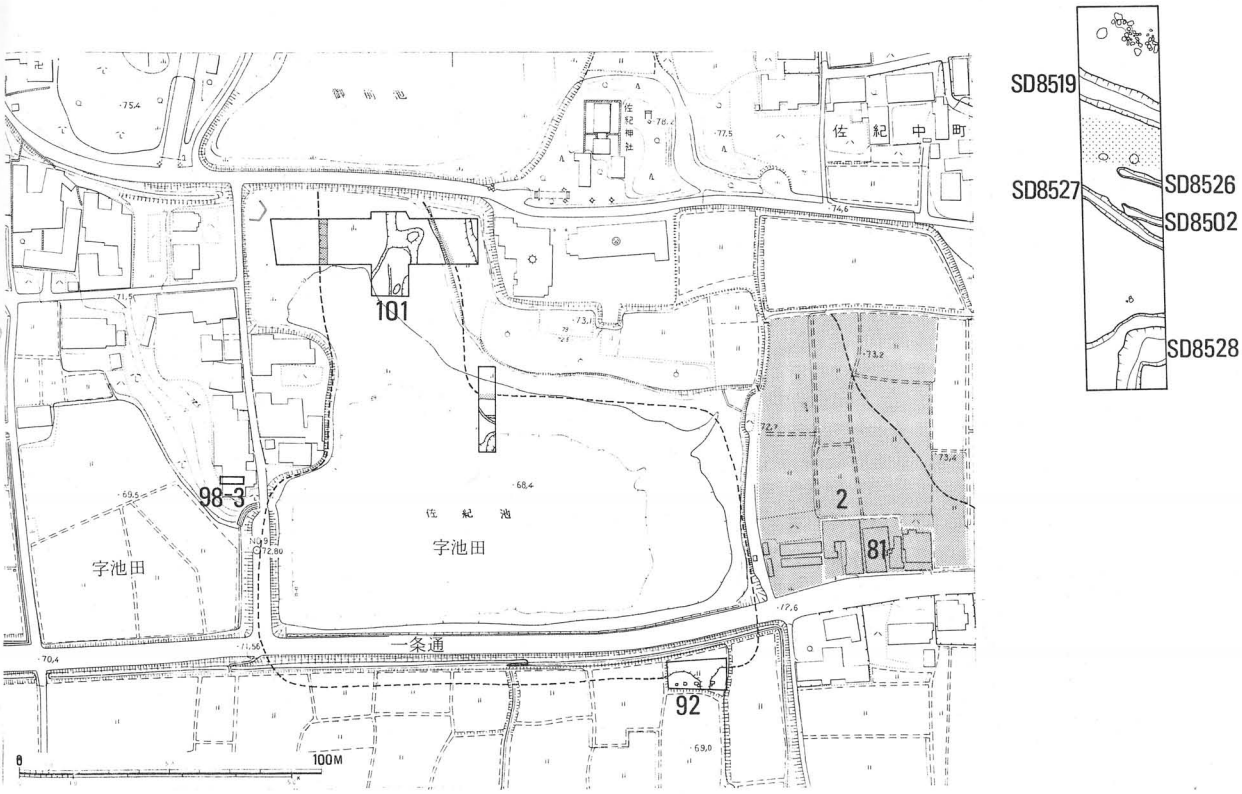
堰ＳＸ８５２４は、溝ＳＤ８５２０の分流の始点に設けられた堰である。幅３ｍの分流の川幅いっぱいに矢板を南北一列に打ち込み、南端では大きな自然木の根を矢板で打ちつけて固定し、堰の部材として利用している。矢板は幅１０～１５ｍ、厚さ約５cmの榊の板材で、先端を尖している。

溝ＳＤ８５２１は、蛇行する溝ＳＤ８５２０の西南岸にとりつく幅1.5ｍ、深さ５０cmのＶ字形に近い断面をした溝で、西南から北東へ直線的に流れてＳＤ８５２０に合流する。溝には上下２層の堆積があり、下層は小石を含んだ灰黒色の砂層、上層は黒色の粘土と有機物の混った層である。上層から布留式の土師器が出土した。

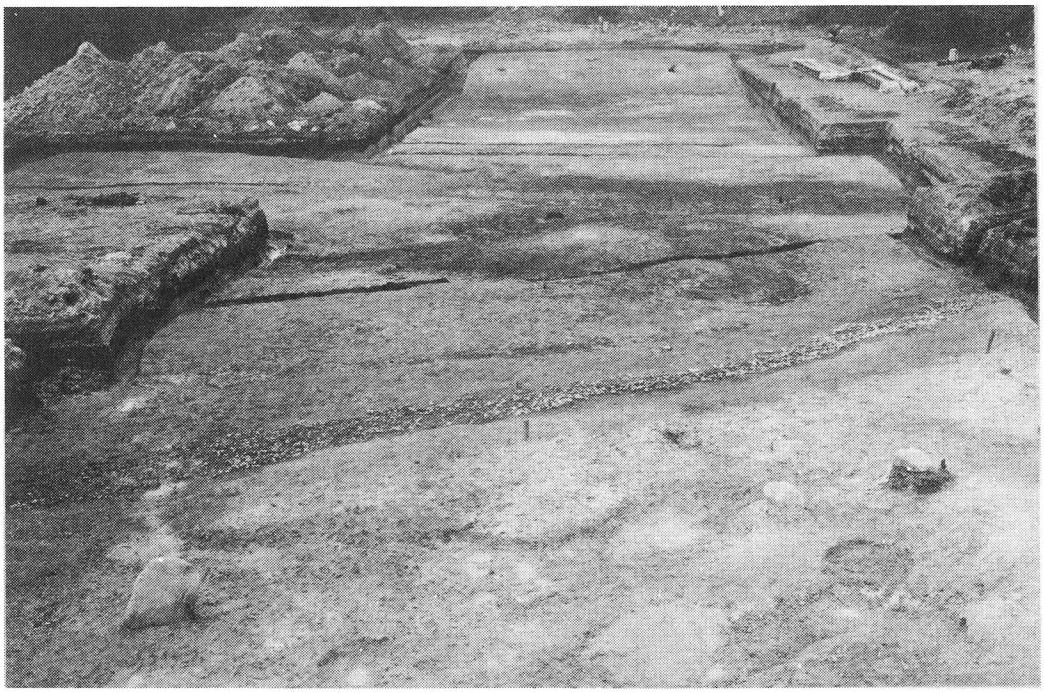
堰ＳＸ８５２３は、ＳＤ８５２１がＳＤ８５２０にとりつく地点から南約４０cmに作られた堰である。溝幅いっぱいに直径約６cmの丸太を一列に打ち込んだもので、丸太の先端は尖っている。ＳＸ８５２３の北３０cmの地点にはこれと平行する堰があったらしく、直径５～６cmの円形のピットが一列に並んでいる。ＳＸ８５２３の前身の堰であろう。



第６図　第101次調査遺構図



第７図　第101次調査位置図



第８図　第101次調査遺構、上は奈良時代池の汀線、下は古墳時代木器の出土状況

溝ＳＤ８５２６とＳＤ８５２７は南北トレンチで検出した素掘りの東西溝である。遺物は出土しなかったが、層位的には奈良時代以前のものである。

土壙ＳＫ８５２５は、東西トレンチ南端で溝ＳＤ８５２０の西に接する楕円形の土壙である。短径1.7ｍ、長径３ｍ、深さ６０㎝で、有機物を含む黒色の粘土が堆積していた。遺物はないが、古墳時代ないし弥生時代のものと考えられる。

Ⅱ 遺　物

今回の調査では、縄文式土器から近世に至るまでの各種の遺物を得たが、ここでは園池ＳＧ８５００と古墳時代溝ＳＤ８５２０出土の遺物、縄文式土器を中心に報告する。

a　ＳＧ８５００出土の遺物

1　瓦塼類

ＳＧ８５００堆積層から、軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、塼などの瓦塼類が少量出土した。このうち軒丸瓦は、６２８２型式１点、６２２５型式１点、６３１４型式２点、６１３４－Ｂ型式１点、型式不明４点の計９点である。軒平瓦は、６６６３－Ｃ型式１点、６６８２型式１点、６６４２型式１点、６７７９型式１点の計４点である。

土器類

ＳＧ８５００から土師器、須恵器が出土した。出土量も少なく、また大部分が小破片であるが、年代のわかる最も古いものには神亀年間頃と推定される須恵器蓋Ａがあり、最も時期の下るものには９世紀中頃の土師器杯Ａがある。

墨書土器でほぼ完形に近いものが１点ある。天平末年頃に編年できる土師器皿AIで、底部外面中央に「天平十八年」の紀年があり、内面には土器の器名と数量を記している。辛櫃に納めた容器の品目と数量を記したものであろう。

墨書土器釈文

	高佐良九	二
	佐良八	佐良卌
〔櫃カ〕	毛比卌	毛比卅
（内面）・二辛二	鋺形卌	片真利廿
	□都支二二	鞄五柄
	土高佐良一	

（外面）・天平十八年潤九月廿七日□□□

木簡

木簡は２点ある。１点は習書風のもので、多数文字があるうち、「小」のみが判読できる。もう１点は文様風のもので、直線数本どうしを斜格子風に組み合わせたものである。

木製品

木製品には、下駄２点、刳物破片２点、甑底板２枚、曲物底板５点、削り掛け２点などがある。他に中世に下ると思われる外面に朱文をもった黒漆椀が１点、ＳＧ８５００から上の層から出土している。

金属製品

金属製品には鉄鎌１点があり、貨幣では神功開宝が１点出土している。

ｂ　ＳＤ８５２０出土の遺物

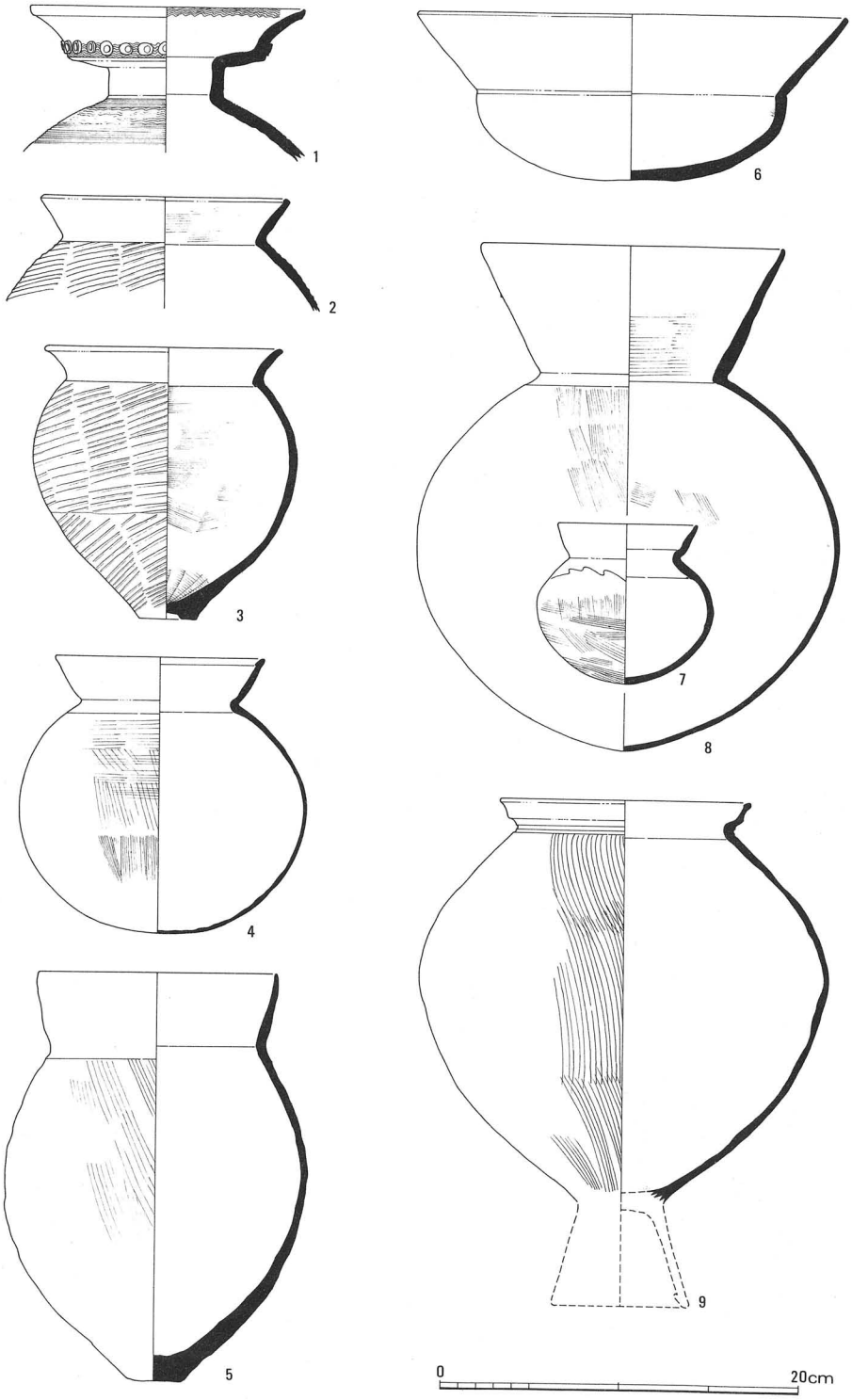
土器類

ＳＤ８５２０出土の土器のほとんどは布留式に属する土師器で、甕、壷、小形丸底壷、高杯、鉢があり、甕の中にはいわゆるＳ字状口縁をもつものが少数ある。他に庄内式に属する土師器甕・壷、後期弥生式土器の甕が少数ある。

木製品

木製品には鋤、きぬた、ちきり、梯子、台板状木製品があり、他に建築部材と推定される板状品もある。また、木製品ではないが、瓢箪も１点出土している。

鋤にはスコップ形の柄身共づくりのものと、なすび形の着柄鋤とがある。前者にはほぼ完形に近いもの２点、身の先端部破片２点があり、後者には完形品１点、破片１点がある。なすび形の鋤は長さ８５㎝の長大なもので、形式的には庄内式の時期に属すると推定される。きぬたは２点とも柄の先端にもどりのある形式である。ちきりは２点、梯子は１点でともに破片である。台板状木製品は平らな板の下面に断面台形の太く短い脚を２本、下駄の歯状に削り出したものである。以上がＳＤ８５２０出土の木製品だが、完形品の多いこと、未成品のないことが特徴的である。



第９図　第 101 次調査出土古墳時代土師器

ＳＤ８５２０南岸の斜面から、小形の素文鏡が１点出土した。直径2.8㎝、厚さ0.5㎜の薄手、小形のもので、鏡背に鈕がつく。白銅色を呈し、錆もない。Ｘ線放射化分折では、錫に比して鉛が多いことが知られ、成分的には日本製の三角縁神獣鏡と近いことが指摘できる。

縄文式土器

東西トレンチで、土層観察のためにＳＧ８５００の池底を部分的に掘り下げた時に、出土した。ＳＧ８５００のベースは灰白色の粘土で、粘土の下は砂とバラスが堆積しており、このバラス層から出土したものである。

総数１２点で、いずれも小片であり、器面の荒れが激しいが、器種のわかるものに鉢形土器があり、総じて縄文時代中期に属するものである。

Ⅲ まとめ

今回の調査によって佐紀池北端部に奈良時代の園池があったことが明らかとなったが、調査面積が少ないこともあって、今回の調査結果だけからは園池の全体的規模は知り難い。しかし、佐紀池の東の水田地域については、第２次調査、第８１次調査が行なわれ、佐紀池の南側では第９２次調査がある。こうした発掘調査以外にも、平城宮造営以前の旧地形の研究もなされており、明治１４年の地籍図や現在に残る遺存地割などを含めて、園池の規模をかんがえてみたい。

a　平城宮造営以前の当地域は、北から南へのびる奈良山丘陵の谷筋にあたる。第２次調査において、佐紀池東岸までの地域が埋立てられていることが明かにされている。推定第一次内裏地域の調査の進展にともない、和銅当初にはこの地域が形成されており、池形もこのころに整ったとみなければならない。

園池の南岸は、部分的だが第９２次調査で検出した。ただし、提を築き水門を設けるのは天平末年頃に比定された。今回の所見からすればもう少し時期が繰上る可能性がある。

西岸南部では、第９８－３次調査がある。その位置は半島状に突出した先端部にあたり、盛土ではなく丘陵の地山であることを確かめた。このあたりは、池底面から３ｍ程度高くなっている。明治１４年の地籍図では現在の佐紀池一帯および

道路を隔てた西側の水田がともに「池田」の小字名をもち、両者とも園池内であった可能性を示す。このように考えると両者にはさまれた小台地は半島形となる。

園池の規模についてのべたが、ほぼ現状の池形が奈良時代に存在したことはまちがいない。園池北端の東西幅と現状の御前池南岸幅および高低については段差があり、両者の連結点には堰ないしは築提を予想せざるをえない。

b　つぎに園池ＳＧ８５１０の造営時期にふれよう。園池東岸の盛土造成は第２次調査によって和銅当初とされ、第９２次調査の結果と矛盾しない。南面に築堤して整備する時期について第９２次調査では天平末年に比定した。しかし今回敷石をおおう植物腐食層から「天平十八年」の墨書土器が出土するとともに、神亀年間の須恵器も発見されているので、天平末年よりも古い時期に護岸がなされていたことは確実である。この地域が和銅創建の推定第一次内裏築地回廊の西に位置していることからも、同様にかんがえられる。その後、園池は奈良時代を通じて存続し、平城上皇の後もしばらくは池としての生命を維持しているとかんがえてよかろう。

c　東院の園池ＳＧ５８００や左京三条二坊六坪の園池ＳＧ１５０４と比較すれば、規模が雄大であり、自然地形を巧みに利用している点に大きな相違点があり、その性格も自から異なるもとと推察される。

『続日本紀』天平１０年の条に「秋七月癸酉。天皇大蔵省に御し相模を覧す。晩頭に転じて西池宮に御す」とある。「西の池の宮」についての記事はこれが唯一であり、詳しくわからない。平城宮の西辺については、第１４次調査以降かなり調査したが、園池に見合う遺構はない。園池ＳＧ８５００は宮の西北にあり、位置的に合致する。以上のようなことから、今回検出した園池は「西池宮」である可能性が高い。